

のものや商工業的のものが足らぬなどいふ様な事がございますかも知れませぬ。とにかく時々立ちかへつて、自分はどうな類のものを常に用ひて居るのであるかといふ事を省るのは必要な事であらうと存じます

## 子供の性行

林 壽 祐

子供の性行は予輩青年の素よりよく研究すべきものに非らざるも予輩が幾多の子供に接し偶然観察し得たことを試に少しく集めたのです

▲子供の生れた當時は、唯乳汁をのみと、眠ると、糞尿を排出すると、啼くのであるが、少しく手足の利く様になると、睡眠の外或は玩具をいぢつたり、或はテクテクと歩き廻つたり、或は他の者に戯れたりして、一時も静にして居らない。これ體量増進の際であるから、遊動はよく食物消化

との平均をとるのです、小供には運動は特に必要であります。

▲總て己を愛する者を好むは、人間の通性であるが、特に子供にあつては顯著である、母親は如何なる者よりも、最も懇切に子供を愛するから、子供は母親でなければ、夜も明けぬといふ程で、慈悲深き観音様の如く、貴く思つてゐるのです。けれども祖母或は乳母が、熱心に愛撫してやると、眞の母親より却つて祖母或は乳母を好くのがある子供は普通父親より、母親に懐くのですが、繼母であると、奇体に父親を慕ふのです。愛の厚薄によつて好慕に變動あるは人情とみえます。

▲子供は嚴重に育つべきか、將また氣隨氣儘に育つべきか、何れにしても一利害があります。嚴重は健全なる子供には結構であるが、纖弱なる子

供は爲めに精神が委縮して、動もすれば怖氣を來たし、物の役にたゝなくなつてしまふ。それから放任主義にすると、子供は我儘が増長して、いつでも無理を通うとする、で暴は益々暴、愚は益々愚になつてしまふ、けれども穎敏伶俐なる子供であると、成長するに随ひ是非善惡を辨へ、縦令父母兄弟の訓誨なくも、一人前の立派な人間となるのです。譬へば庭木などは、小さい時から、幹を曲げ枝を伸ばし芽を挫きなどして世話をすると、奇態に變育して、大に觀賞されるにいたるが、或る木はセツカンに堪へられないで、途中で枯損してしまふ、之に反し植木屋の手にかへず、氣儘に成長させると、雅もなく趣もなく、唯ノツンリと突立ッてるばかりであらうが、或木は大幹となるに随ひ、自然の枝振を現はし、却つて幽雅な姿

になるのです。

要するに子供を養育するのは、其體格の健否、其性質の穎鈍に鑑みて一々斟酌し、嚴に過ぎず緩に失せず、能く其中庸をとり、臨機應變の所置を施すのが、肝要であらうと思はれます。

▲子供は負はうとすれば、抱からうとする癖があつて、甘い聲をかけると、つけあがつて仕方がないのである、で餘り馴れ親むと、權者といへども馬鹿にして巫山戯かゝり、果ては戯談にも悪口を放ちて來るのがあります、故に子供には時々威嚴を示さねばならない。

小供を放任主義に育てると、鷹揚でよいが、人の前でも不行儀なことをして、母親の面皮をかくことがある、又來客に失禮をして、感情を害することもあります。

▲子供の中には、來客でもあると、母親の小事のないのにつけ込み、金銭を請ツたり食品を乞ふたりするのがある、又平常餘り嚴格にして居る家の子供は、客間に來り、家人の立去る隙を狙らひ、急ぎながら客の前に供えてある茶菓子を握みとり潜に逃げ匿れるのが往々あるのです、客の方ではこらこら取るのではないと制する譯にもゆかず、さりとして家人の居らぬ間に、さき卑しいをした様に思はれ、甚だ迷惑である。これ家庭教育の不完全な爲め、子供の了見が自然と鄙しくなつたのである。

▲「子供は正直」といつて、善性悪性にかゝはらず六七歳頃までは。多くは天真爛漫で、虚偽をいはないが、不良の輩は、八九歳の頃から往々虚言をいつたり、飾言を呈したり。或は人の物を盗みとつた

りする。就中女子は早くも先天的の嫉妬を發し、頗る憎愛に注意し、所謂陰日向裏表があつて、上長權者に媚び、朋輩を讒誣し、其賤しむべき法性は、尋常小學校時代から高等女學校時代までも、多くは増進するのです。

▲子供がわるいことをしたら、叱責するのみでなく、後で慰め勵ますといふことは最も必要であります。例へば學校の試験に落第した時など、馬鹿め畜生め意氣地なしめ、何所へでも出ていきやがれと、頭から怒鳴り騒ぐと、子供は失望と恐怖の爲め、了見が變になつて、益々愚物に陥つてしまふ、所が一度は叱責しても、後から同情を表し、懇々と獎勵慰激すると、却つて興奮劑となつて、好結果を得ることになるのです。

▲十歳前後の子供は概ね頑是なくて、主従の輕重

を知らず、主客の分別を悟らないから、子守の分  
で主人の少嬢と權利を争ひ、食客の境遇で、置主  
の幼兒を抑制するなど、憎くむべき程の罪科はな  
いのです。

▲子供は賞めるを喜び、けなすとされるから、平  
常善いことをしたら、充分褒めはやすとだん／＼  
と善い事をして來るのです、で使ふのにも、何々  
を持つて來いとか、何々をしるツとか、命令的に  
いふよりは、寧ろ、惻口だから何々を持つて來て  
呉れとか、感心な子だから屹度何々をするよと賞  
めながら使ふと、大義がらずに、嬉し喜んで用を  
たすのです。

▲無學なる父母も、子供からみれば、萬能の博士  
の如く思はれ、新に出會したことは、直にこれを  
父母に質問し、出來得る限りは其疑念をはらさん

とするの癖があります。父母は實際子供の教員で  
ある、朋友である。宣教師である、司法官である  
行政、官である、軍人であるのです。

▲子供は物を真似るの性がある、例へば演習があ  
ると、何れの小兒も活潑となつて、竹刀を携へ、  
喇叭を吹きなどして、軍隊の真似をし、祭禮があ  
ると其當時は南瓜などに棒を貰ひ、神輿に擬して  
擔さ廻はり、芝居があると動もすれば假聲を使  
て家人を笑はし、其他角力にても流行謠にても、  
見聞して感じたものは、悉く其真似を試みるので  
ある、孟母の三遷は、此性を示した好例でありま  
す。

▲故に小供をして良風美習に養成しやうとならば  
幼年時代の朋友を、最もよく撰擇せねばならぬ。  
善惡何れかといふに、大概悪い方に染まり易いの

です、近頃學事獎勵の結果、下流社會の子供が著るく學校に通ふて來た、で良家の兒女は日々これら家庭のよろしからざる數多の生徒と遊ぶので、不知不識の間に不良の言行に感化され、従前に比しては、大に兒女の品位を落して來た様であります、人情からみると貴族の子弟と貧業者の子弟と同窓に學ばせるのは、誠に感服しられない、貴族の學校は何うしても別に設置しなければならんかと思はれるのです。

▲子供の最も愛らしいのは、少しく辨別がついて笑はれる頃から、漸く言語を發し得る頃である。で五六歳までは、猶言語舉動に愛すべき所があるが「セツ八ツの憎まれ盛り」といつて、七八歳の頃は辯は充分たち、手足は充分引き、そうして未だ遠慮會釋といふことを知らない故、好んで人に

擲擲ひ、惡戯をなし、動もすれば惡口を放つので人に嫌がられるのです、女子は十一二歳の頃からや、遠慮といふことを覚え、十四五歳の頃は一變して頗る謹慎となり。十七八歳よりは、發情期と共に大に愧氣を催ふし、些々たる言語にさへ、顔を赤らめるのであります。年頃になつて人中で餘りシヤーシヤしてゐるのは、女子に取りて趣といふものが一更ない様に思はれます(終)

## 二四戲會

楠 田 睦

私が田舎を出て丁度四年計り東京で諸姐の御厄介に成て居ります内に種々面白き御話等澤山に承りましたが、此二四戲會程滑稽で併も眞面目で面白き話は且て聞た事が御座ひません、尤交際が狭